

橋本さんは、昨年1年間マニラに滞在し、日本に働きに来て傷ついたり問題を抱えているフィリピン人女性を支援するNGOと、ストリートチルドレン支援NGOでボランティアをなさってきました。また、ルソン島北部のカリンガ州で植林の経験もあります。

今回植えた苗は、マホガニー、イピルイピル、マンゴー、ドリアン、マラン、ジャックフルーツ、カラマンシーなど様々です。1種類の植物だけを植える単一栽培は、病害が心配されますし、山の保水になりません。1番最初に収穫が期待されるのはマンゴーで、3年後です。その間村民たちは、苗周りの除草や施肥などして、大事に苗木を育てます。

ツアーを終えて、お2人から感想をいただきました。第1回ということで、不慣れな点がありましたが、来年もぜひ実施したいと考えています。会員みなさまの参加をお待ちしています。

ミンダナオの顔

橋本みずほ

やっぱりあった、たくさんの喜びが、たくさんの驚きが。ミンダナオに暮らす少数民族のコミュニティには、数え切れない笑顔と、キラキラした瞳を持つ子ども達がたくさん待っていた。ホッとした。

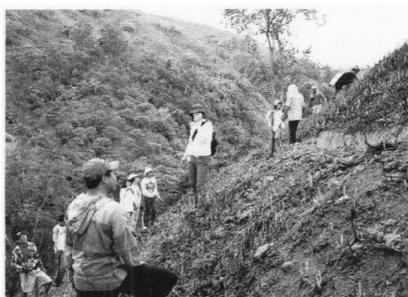
今回はじめてミンダナオという地に足を踏み入れたけれど、ここにもたくさん幸せがあった。とはいっても、1年生活したマニラや、頻りに訪れているルソン島北部の村には見られない顔、違いももちろんあった。想像以上のシンプルライフに、ある種のショックで丘の上に立ち尽くしてしまっただけだ。



橋本さんとチャリタ先生の養子のアイシーちゃん

しかし目をつぶれないことは、滞在したラムフゴン村で目にした子ども達のボロボロの服、栄養失調、虫でパンパンに膨れ上がったお腹。サムラングの有機デモ農場で、同世代の女性達とバナナの植林をした際は、彼女たちの農業に関する知識のなさに驚いた。現金収入の無い村の生活は、自給自足をしているとばかり思っていた。聞いてみれば、ハイスクールに通えず、13、14歳で妊娠したそうだ。小学校の卒業とともに子育てに追われたのだろう。17歳で既に3人の母という女性は、汗をぬぐい、株分けしたバナナの苗に土をかぶせながら言った。「日本では産後に病院行くの？」ここではお産する時にも助産師などおらず、自らやるしかない。本当にこわい。でもほかに手段は無い。さらに「たくさん問題を抱えているのは、私達だけだと思っていた」。同い年の2児の母に、驚いた表情でこう言われた。ラムフゴン村では、滞在した家はまるで出張デイケアになった。子供たちは珍しい訪問者が嬉しくてたまらなかったようだ。真っ暗になって互いの顔が見えなくなるまで、歌をうたい、ゲームをした。私たちが去ったら遊び相手がいないとしきりにいっていた。新しいもの、ことに、興味津々だった。それでも「自然も最高、家もきれいで、美しい村でしょ。子供がたくさんいて、ほんとうに幸せなところでしょ。」と言い切る彼らがうらやましいとさえ思った。「日本？行ってみたいけど、そしたら家でお母さんの手伝いをする人がいなくなるもの。」夜8時ころ家の家事手伝いを終えてから、私のところに遊びにきた8歳の女の子は言った。

急な丘での植林作業は、情けないものだった。子供ですら苗木を担いでスイスイと上っていく。私は体重を支えるだけで精一杯。すべるからとサンダルを脱ぎ、扇形に広がった大きな足で丘を登っていく村人は、本当に自然と共存しているんだなと思わされた。



急斜面に立つ

フィリピンという国で、私はリラックスできる。解放感を感じる。余分なものが無いところで、一時的にでも生活を共にし、生き生きとしている子ども達と遊んでいると、自分も元気になっていく。元々の気持ちを自然と思い出す。私がフィリピンに惹かれ理由。ミンダナオでも見つけた。